

野鳥たより

—北海道—

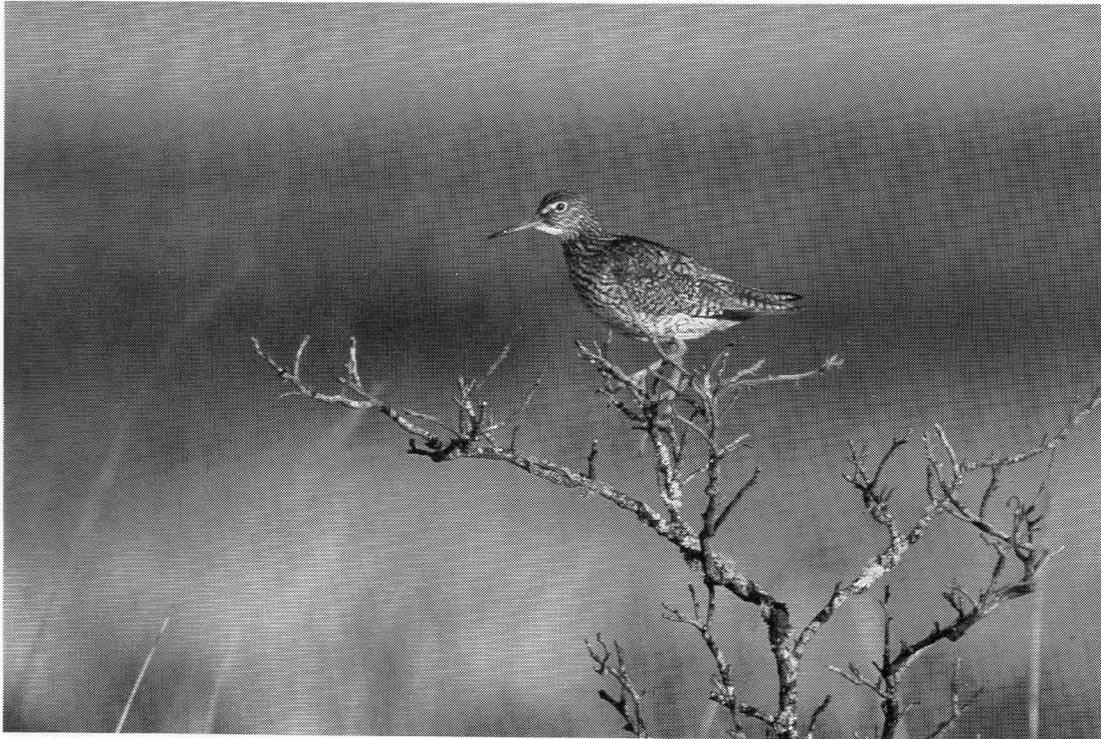
ISSN 0910-2396

第 120 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成12年6月20日

アカアシシギ



1997. 6 野付半島 撮影者 鈴木正之

〒062-0031 札幌市豊平区西岡1丁目10-3-10



もくじ

私の探鳥地 (37) 礼文島に翼を休める鳥たち (春の久種湖)		
道場 好	2	
札幌市内において規則正しく分布するチゴハヤブサ		
(札幌チゴハヤブサの会長) 工藤 忠行	4	
北海道におけるカワウの群れ	樋口孝城・広川淳子・新城 久	7
平成12年度総会報告		8
オオカラモズ観察報告 (日本野鳥の会室蘭支部)		
篠原 盛雄	10	
探鳥ほうこく	11	
探鳥会あんない	14	

私の探鳥地 (37)

～ 礼文島に翼を休める鳥たち (春の久種湖) ～

どう じょう よしみ
道 場 好

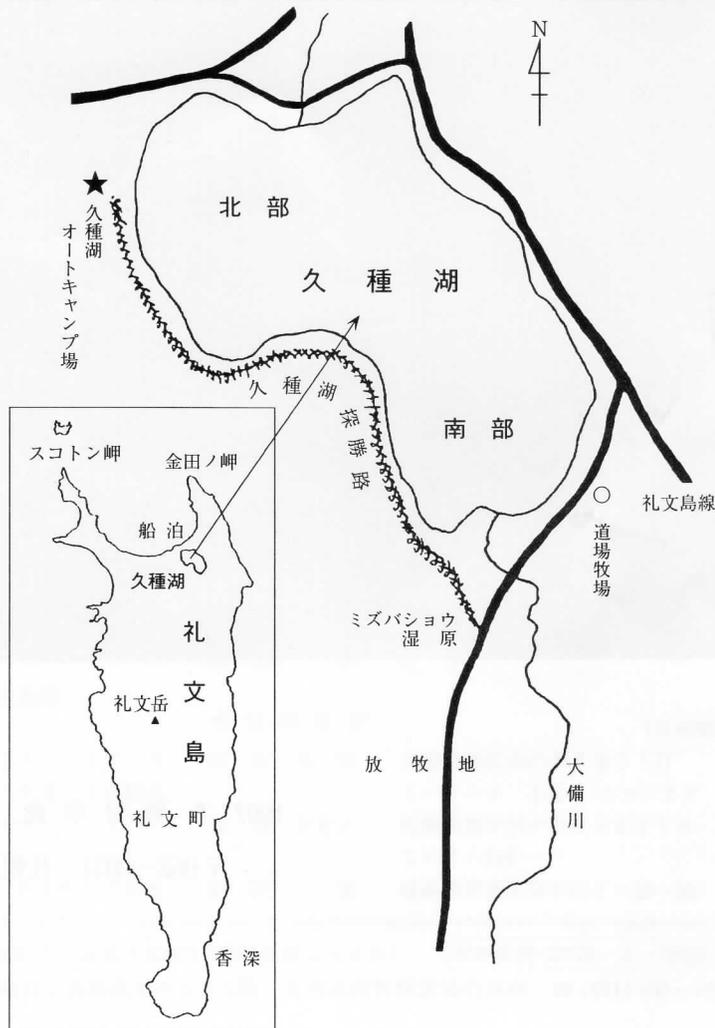
北緯45度20分、東経141度0分。
最北の街、稚内港より新型フェリー
で2時間。日本海に浮かぶ、周囲72
km、面積82平方kmの礼文島がある。
高山植物の咲く花の島として、多く
の人々に知られているが、多数の渡
り鳥が寄り道をする島としても、注
目を浴びようになってきた。

私は、この礼文島の北部の久種湖
(くしゅこ)の湖畔で酪農業を営み、
四季を通じて稀鳥、珍鳥の姿を見る
機会に恵まれてきた。その感動の数々
と、久種湖周辺の観察ポイントを紹
介してみようと思う。

久種湖は、周囲4kmで、周りに自然探勝路があり、のんびり1周すると1時間位で歩くことができる。久種湖の鳥の観察は、水辺の鳥と山の鳥、野の鳥でその確認種140種をこの周辺で見ることが出来る。特に春の久種湖は、珍鳥にめぐり逢える事が多いので、目配を大いにして欲しい。

久種湖の鳥の観察ポイントは、大きく分けて北部と南部である。(図参照)

北部には、海に注ぐオシヨンナイ川を中心にオートキャンプ場があり、その周辺ではマガモ、キンクロハジロ、ヨシガモ、カルガモ、カワアイ



サ、オシドリなどのカモ類が確認できる。またアオサギ、ダイサギ、チュウサギ、ヨシゴイなどサギ類が、湖岸で餌を取る様子も見ることが出来る。

オートキャンプ場から放牧地までは、自然探勝路があり、ジョウビタキ、アオジ、カワラヒワ、ノビタキ、コルリ、ノゴマ、ベニマシコ、カワセミなども見る事ができるので、のんびり歩く事をお勧めしたい。また、4月上旬～5月上旬の間なら、運が良ければあの“幸福の鳥”（「私だけかしら」と妻の一言）のヤツガシラに逢えるかも知れない。礼文島線の道端の芝生にはよく注意のこと。ふわり、ふわりと飛んでいたなら、足を止める事。もしかしたらヤツガシラかも？

南部には私の家、「最北端の牛乳」の店と、牛の放牧地があり、周辺の山に囲まれたミズバショウの群落の咲く湿地がある。4月上旬、毎年放牧地では100羽以上のミヤマガラス、ツグミの大群、タゲリやケリが見られ、アトリ、ミヤマホオジロ、クロジ、モズ、イカル、シメ、ムギマキ、エナガ（シマエナガ）が順を追って我家の畑に現われる。シロハラホオジロ、コベニヒワ、ノジコが現れたこともある。（シロハラホオジロやコベニヒワ、ノジコはいずれも目の前で図鑑を見ながら確認できたものであり、他の人も久種湖で確認しているのでまちがいないと思われる。）この頃は森の奥からアカゲラのドラミングの音。ウグイス、コマドリの声が盛んに聞こえてくる。



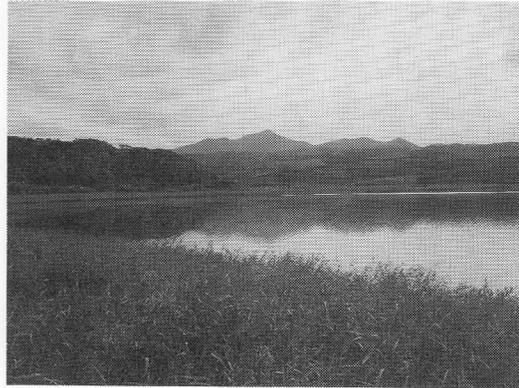
アマサギ 道場 好撮影

5月中旬、牛の放牧が始まる頃、ミズバショウの花と間違える白いアマサギの群れが飛来する。外敵のカラスから身を守るべく、用心棒（牛の群れ）の周りで餌を取るアマサギを至近距離で見ることができる。この頃、順を追ってセイヨウタンポポの花が放牧地に咲くと、きまってツメナガセキレイの群れが旅から戻る。ツメナガセキレイ（前亜種名キマユツメナガセキレイ）の中に、亜種マジロツメナガセキレイが混じる事があるので、注意

して見たい。私にとっては、旅人が帰って来たかのように、搾乳の端で恋を育むツメナガセキレイたち。空には大きな羽音をたてて急降下するオオジシギ、1羽ならまだしも、次から次と5羽も続けたらうさいくらいののんびりと夕暮の空にオオジシギの羽音を聞くのも良いかもしれない。

放牧地より山の奥への道を進むと、空にワシ、タカの類を見るのもこの頃。トビ、ノスリ、ハヤブサ、チョウゲンボウなど。

久種湖周辺の春は、まさに水辺の鳥、山の鳥、野の鳥と狭いエリアの中で、多くの鳥がウォッチングできる所としてぜひお勧めしたい。特に朝と夕方はウォッチングできる鳥も変わるので、頭に入れておいて欲しい。



ざっと礼文島の北部の久種湖の春の鳥の様子を書いたが、最後に、私は、51年の島での生活の中で、久種湖の周辺に翼を休めた鳥たち、稀鳥、珍鳥を特に探したのではなく、仕事のあい間に鳥を見て来た。その中には、特に印象深い鳥として、シロハヤブサやシロフクロウ、コウノトリ、ヤツガシラ、ダイシャクシギ、ユキホオジロなどの鳥がある。これらの鳥は自分以外の人も見ているが、今にして思えば、写真にでもとっておけばよかったと思う鳥との出逢いも多くあった。ルリガラと思われる鳥にも出逢ったが、写真など具体的な証拠もないため、自分だけの記憶にとどめている。それにしても、今と較べて昔は随分と鳥の数も多かった様な気がする。

これからも、鳥を観る1人、1人がマナーを守り、より自然を大切に、いつまでも身近で鳥の観察ができる礼文島であって欲しいと、心より願わずにはられない。礼文島、久種湖の春は寒いけれど、きっとこの久種湖が多く鳥との心暖まる出逢いのある素晴らしい所だったと思っただけのものだと確信する。

〒097-1111 礼文郡礼文町船泊字沼の沢

札幌市内において規則正しく分布するチゴハヤブサ

工藤 忠行 (札幌チゴハヤブサの会会長)

寒く長い冬の季節から解放され、にぎやかなさえずりを耳にして感じる小鳥のシーズン明けから、初夏への移ろいの時期を迎えています。皆さんの活動もいよいよお忙しい時期かと思えます。この度、貴会会報に原稿を依頼され、私たち「チゴハヤブサの会」の活動を、報告させて頂く機会が与えられました事、お礼を申し上げます。平成8年に、野鳥の事もほとんど知らない者ばかりで発足した会ですが、今日まで皆さんからの情報や、様々なご指導のおかげで何とか、活動も軌道に乗りつつあります。本当に心からお礼を申し上げますと共に、今後とも変わらずご指導お願いいたします。

チゴハヤブサの簡単な紹介

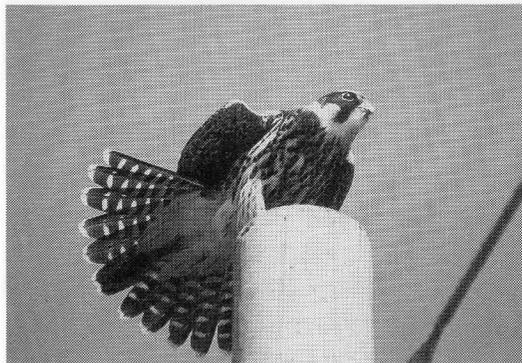
チゴハヤブサは夏鳥として日本に渡来し、東北地方の一部と、北海道で繁殖します。北海道はほぼ全域に分布している様です。ヤッコさんの様に、顔にヒゲをたくわえた精かな顔つき、それでいて愛くるしい顔立ちが、見る者をとりこにします。札幌へは4月下旬から5月上旬に集中してその姿を現わします。巣はほとんどがカラスの空いた巣を利用し、自らは産座の手直しぐらいのもので。産卵はほぼ6月に行われ、卵はピンポン玉程の大きさで淡い褐色に斑点があります。数は3~4個産み、抱卵に入ります。抱卵期間約1ヶ月、育雛期間1ヶ月で巣立ちを迎えます。札幌において、巣立ちを迎えられるのは平均して2.7羽程です。巣立ち直後は巣周辺で、それぞれの止まり木にて親から餌を与えられて育ちますが、飛ぶ力は驚くほどで、元気の良いのは巣立って3、4日でトンボぐらいは捕獲出来るようになります。私がチゴハヤブサに夢中になった理由の一つは、子育ての素晴らしさに感動させられたからです。その第1はカラスとの戦いでしょう。街中で生息し、カラスの空いた巣を使用しますから、結果としてカラスの生活圏を奪う事になります。チゴハヤブサはまず営巣する巣を決めると、その周辺のカラスやトビに対し、徹底した排除攻撃を展開し、安心できる繁殖環境を作ります。そうしますとカラスやトビも容易に巣に近づく事はなくなります。しかし、札幌においてカラスの密度が濃い林や、夕方ねぐらに帰るコースの都心部においては、時としてカラスの集団攻撃が展開されます。その場合おうおうにして20羽以上の体制を作って波状攻撃を加えます。その為、チゴハヤブサの卵やヒナが全滅させられるケースは毎年の様に1、2件あります。卵やヒナを守る為3、4倍も身体が大き

いカラス、それも20羽以上も相手にして戦う様は、言いようのない感動を覚えます。カラスの異常繁殖が伝えられたこの2、3年は、その頻度も多くなっています。子育てはかいかいしく、育雛期においてはヒナの成長に合わせた餌の与え方が工夫されています。巣立った後も、最初は巣の周辺においていっしょにトンボ獲り等を繰り返しますが、徐々に行動半径を拡げ、実際小鳥を捕らえる場面を見せつけたり、上空から餌を落とし、ヒナが急降下してその餌をキャッチさせる等、渡りに向けた訓練と思われる行動が繰り返されます。そうして9月末~10月初旬私たちの前から姿を消して行きます。

札幌におけるチゴハヤブサの調査報告より

この報告は、1994年~1998年の5年間、札幌における調査・観察の結果報告(野生物保護学会、ワイルドライフフォーラム、4巻4号、1999年8月掲載)より、その内容をかいつまんで紹介します。図を見て頂きますと、少し黒っぽくなっている部分が市街地です。古い年から徐々に営巣地点の確認数が増加していますが、これは、チゴハヤブサの渡来数が増えたと言う事ではなく、私たちが確認出来た数が増えたにすぎません。ここでの特徴をあげますと、

- (1) チゴハヤブサは市街地に分布し、繁殖している事がわかります。まだまだ空白地域を残しているとは言え、ほぼ市内全域に分布していると言えます。1998年(平成10年)は20つがいの営巣確認が出来ています。うち18カ所において繁殖が成功し、2カ所で失敗しています。この数は1999年においてもほぼ同様の数が確認されています。私どもの力不足から、尚繁殖していても



千葉 廣さん(札幌チゴハヤブサの会)撮影
1994年8月 札幌市北区屯田

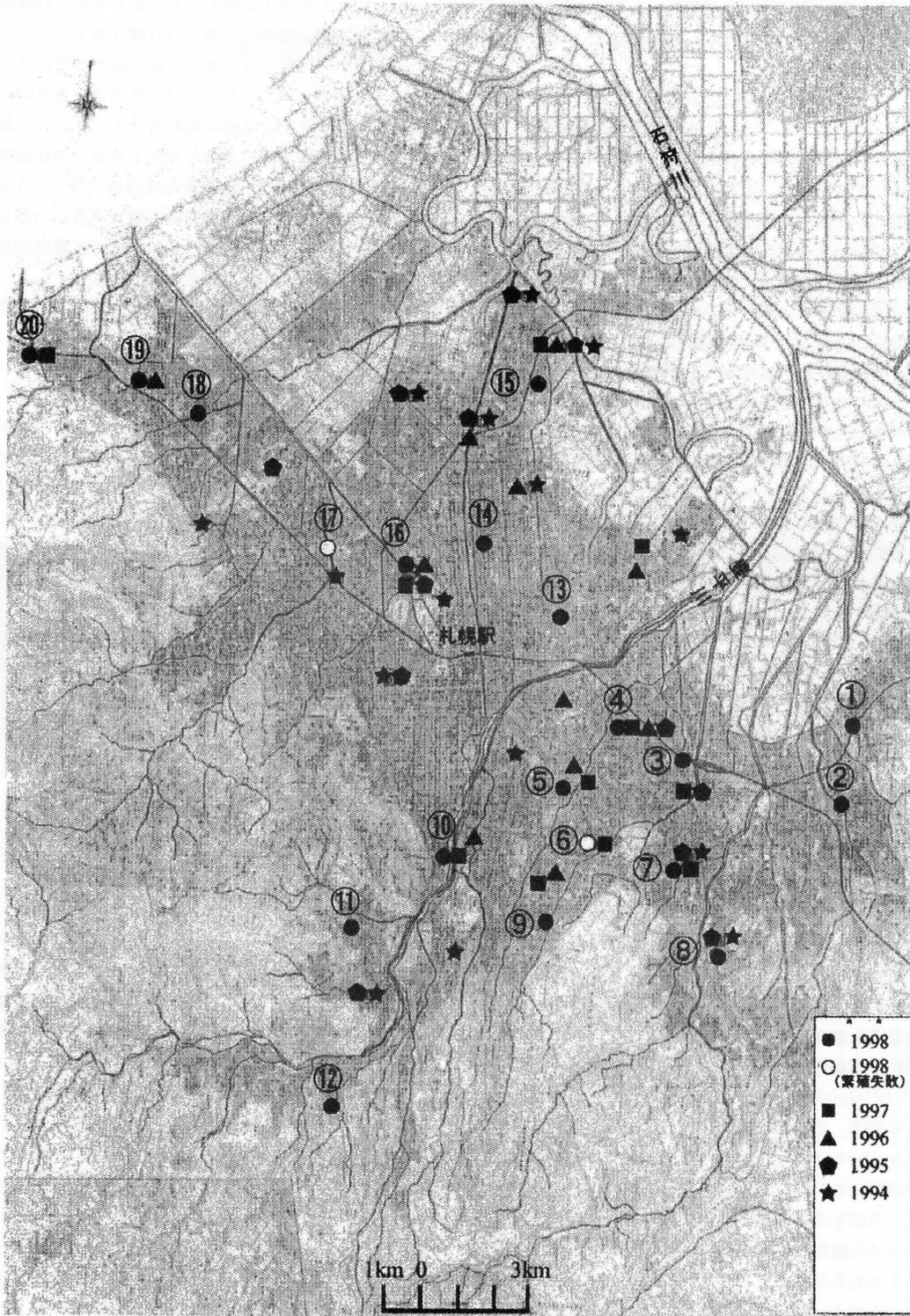


図1. 1994年～1998年のチゴハヤブサの営巣地点。●と○は1998年の営巣地点（前者は繁殖に成功、後者は失敗）。■は1997年（繁殖に成功、以下同じ）、▲は1996年、◆は1995年、★は1994年の営巣地点を示す。複数の記号を横一列に示した地点は同一の巣であり、それらの中で最も新しい年の記号で示した点が営巣地点である。

確認できない場合があると思われませんが、この札幌には毎年20つがい以上が渡来し、繁殖していると言えるでしょう。

(2) 次に、注目できるのが営巣地点間(巣間距離)の距離的關係です。それぞれの年度毎に見ていただかなければなりません、大きく離れているケースを除いて、近接する巣間距離を測定しますと、豊平川南側においては1.8km~2.6kmで、平均2.2kmの間隔で規則的な配置をとっています。北側も営巣地点の密度が低く、距離的關係は明確とは言えませんが、近接の巣間距離の平均は2.4kmと、それ程の違いは見られません。そこで密度の違いと営巣地域の生息環境が良い状態で保たれている場合、何年でも同じ巣を使用する習性が認められますが、それらは、地形の違いが大きく影響している事が解りました。北側は、札幌市の中心部とその北側に広がる住宅地であります。中心部は豊平川の扇状地、その北側はかつての氾濫源であり、従って地形は平坦で、川筋も南側に比べて少ないのです。南側は穏やかな起伏のある台地であります。南西部の山地・丘陵から幾筋もの河川が豊平川と同様に北東方向に流れ、つぎつぎに豊平川に合流します。それらの川に挟まれた地域が丘陵を形成し、小さい林も比較的残っています。チゴハヤブサの営巣地点の周辺は、高い位置における広い空間が確保されるのが共通しています。また、南側における起伏のある地形は河川の流入が多く、餌である小鳥や昆虫の密度が濃いものと予想できます。一方、北側の平坦で小面積の林も少なく、従って樹高の高いポプラや送電線の鉄塔を利用するケースが多くなっています。

(3) 営巣の移動について述べます。チゴハヤブサは営巣地域の生育環境がたまたたれているならば何年でも同じ巣を利用する事は前述しました。この図では1998年営巣地点を基準にして番号を付けていまして、年毎の記号が横一線に並んでいるのが同じ巣を利用したケースで、それ以外は移動した距離と方向を正確に印したつもりです。ここに移動を余儀なくされる条件を示しますと、①カラスの営巣が長引き、チゴハヤブサの産卵期に間に合わない。②巣が古く使用不能におちいつて。③前年の営巣期において、卵や巣立ち前のヒナがカラスの襲撃によって全滅させられた等の自然条件と、④人為的条件として、カラスの巣であるため、町内会や行政の手によって巣が落とされる。⑤巣の至近距離における住宅建設や、周辺の樹木伐採など、著しい環境の低下などの理由によるものと考えられます。しかし、これらの条件によって移動しても、その移動距離

は数10mから高々1km程のものであります。1998年以前に営巣が確認され、この年には確認出来なかった地点がいくつか点在しますが、正確な個体識別はできていませんから、同じつがいが同じ営巣地点あるいはその周辺に営巣したとは言い切れません。しかし、新規のつがいが営巣地点を選択したとしても、5年間の営巣地点分布は、前述の営巣地点間距離(2~2.5km)に保たれています。比較的移動距離が大きいのは近接する営巣地点が少ない場合であり、従って移動距離は営巣密度によって影響されると考えられます。

(4) 形成しているテリトリー

札幌におけるチゴハヤブサの営巣地点の分布について、豊平川南側の営巣密度が北側に比べて大きく、その営巣地点間距離も大きな差のない事も示しました。又1994~1997年の最近接距離を見た場合でも、1998年の最短距離(1.8km)以下のものはなく、これらはチゴハヤブサが一定のテリトリーを持つ事を示唆していると考えられます。実際に複数の営巣地点で、つがい以外のチゴハヤブサが巣に接近し、営巣個体がこれを追い払う行動が観察されています。豊平川の南側と北側において営巣地点間距離に大きな差の無いことは前述しています。したがって、密度が低くても最低この程度の利用巣間距離が必要である事を示して、これも一定のテリトリーの存在を示す事になると考えられます。

市民にとってかけがいのない貴重な財産

大都市に成長した、札幌の住宅地に猛禽類が規則的に分布し、繁殖している事は驚く事であると同時に、うれしい思いを強くします。猛禽類が生息できる環境は、そこに豊かな自然が存在している証であると言われます。餌となる小鳥や昆虫が豊富に生息し、かつ、それらの餌となる生物が豊かで有り、またそれらを育む豊かな土壌が存在している事を意味します。従って猛禽類の保護を通じて地域の自然環境を守ろうとする運動が作られつつあるのです。私たちは自ら生活する地域の環境に対しては、うとくなっていると思われま。生活する地域の環境に順応するかたちで、生活を組み立てていますから、あらためて考える機会を失いがちです。札幌も振り返って見ますと、その自然環境は大きく後退しています。従って、現在渡来し、繁殖活動を続けるチゴハヤブサの存在は極めて貴重なものであり、市民の財産として保護運動を考えて行くことは、同時に私たち市民がより好ましい生活環境を得る為の課題でもあると思えます。

〒002-0854 札幌市北区屯田4条1丁目4-3

北海道におけるカワウの群れ

樋口孝城・広川淳子・新城 久

魚を頭から丸飲みにすることから生まれた言葉の「鵜飲み」、岐阜県長良川の夏の行事として有名な「鵜飼い」。ウ（鵜）は昔から馴染みの深い鳥の一つです。日本にいるウの仲間（ペリカン目ウ科の鳥）は、カワウ、ウミウ、ヒメウ、チシマウガラスの4種ですが、ウとってすぐに連想するのはカワウとウミウではないでしょうか。川にいるのがカワウ、海にいるのがウミウということではありません。長良川の鵜飼いのウはウミウです。

北海道の各地の沿岸海域で見られるウの多くはウミウです。ヒメウもみられますが、ウミウに比べて数は少ないようです。海からかなり離れた内陸部の河川沿いなどでも時々ウが見られますが、それもウミウのようです。「ウミウのよう」と書いたのは、「多分ウミウだろう」と



写真撮影 新城 久 1999年4月2日

いう意味合いを含むからです。北海道ではウミウは留鳥ですが、カワウはまれな夏鳥とされています。実際にカワウを見たという話は少なく、見たという話でも1、2羽程度であり、記録として残されているものもわずかしかありません。

昨年（1999年）4月に私たちは石狩川と篠津川の合流点付近（江別市八幡）で最大100羽にもなろうとするカワウの群れを観察しました。大きな群れの記録は北海道では多分初めてだろうということで、日本野鳥の会研究センターが発行しているStrix（野外鳥類学雑誌）に観察記録を投稿し、最近号（第18巻、2000年）に掲載されました。1年だけのことでしたらたまたまということもありますが、今年（2000年）の4月も同所で、数は昨年に比べて少し少なかったのですが、やはりカワウの群れが観察されました。昨年も今年も群れの個体数は4月初めが最大で、徐々に少なくなり、5月になるとほとんど

いなくなってしまうという、同じような傾向でした。

昨年初めてカワウの群れを発見したのですが、本当は昨年よりももっと以前から同所に立ち寄っていたようです。というのは、以前にも私たちや他の人たちが春には同所にたくさんのウがいることを見ていたのですが、ウミウとばかり思っていて、確認を怠っていたからです。北海道にはカワウはほとんどいないという先入観があり、「ウミウ多数」と記録帳に記入するだけで済ませてしまっていた可能性があります。昨年になって初めてカワウと確認したのは、たまたまその時、近くの木の上で交尾行動のようなものが見られたり、巣材をくわえているような個体が観察されたりして、ウミウにはおかしいなと思ってじっくり観察したからです。ウミウとの識別ポイント（羽色、嘴会合部の形など）については図鑑などに詳しく書かれていますが、もしその時に上に書いたような行動が観察されなかったら、ウミウとして見逃されていたかもしれません。もちろん実際に繁殖ということはありませんでしたが、群中の個体の多くが夏羽（繁殖羽）であり、勝手な想像からいえば、どこか他の地域での繁殖を控えて、そのような行動を示していた可能性もあり、興味が引かれることです。

観察された群れがどこから来て、どこへ行くのかについては専門家の方々の話も伺いましたが、現段階では推測困難です。将来、北海道での繁殖の可能性はどうか。本州各地では近年カワウの増加が問題視されています。一つにはコロニーのある森の糞害などによる枯死の問題です。もう一つはアユなどに対する漁業被害です。特に後者については漁業共同組合などから苦情が増加し、駆除を含む対策が要望されている地域もあります。北海道で繁殖する鳥に新しい仲間が加わることは、ある意味で歓迎されることですが、カワウについては単純に期待することはいささかの問題を含むようです。将来に備えて、北海道における今後のカワウの動向を、注意して見守る必要があります。

石狩川・篠津川の合流点に立ち寄るカワウの群れは、北海道の他の地域を通過しているはずですが、たとえ小さな群れでも観察することがありましたら、是非ともご一報下さい。

樋口 002-8065 札幌市北区拓北5条2丁目10-17
広川 002-8029 札幌市北区篠路9条2丁目11
新城 011-0027 札幌市北区北27条西12丁目6

平成12年度総会報告

日 時：平成12年4月15日(土) 午後6時～8時

場 所：札幌市民会館 第4号会議室

谷口一芳会長の挨拶のあと、議長に小堀焯治氏を選出し、議案審議が行われ、原案どおり可決承認された。

<議 事>

1. 平成11年度事業報告

[総 務]

(1) 野鳥写真展の開催

開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー

開催期間：平成11年4月27日～5月16日

出 展：8名、16点

(2) 「野鳥だより」の発送(116号～119号)

(3) 新年野鳥講演会、スライド映写会の開催

講 師 葉山政治氏「ウトナイ湖の野鳥たち」

平成12年1月8日、札幌女性センター

参加者：48名

(4) 愛護会名入りカレンダーの作成

100部(1部1,000円)

(5) 定例幹事会の開催(原則として毎月第1水曜日)

(6) 傷害保険の更新

(7) 30周年記念誌作成委員会検討会開催 3回

[広 報]

「野鳥だより」116号～119号の発行

[探 鳥]

探鳥会 20回。参加者累計 706名。(1回平均 35名)

「野幌森林公園を歩きましょう」開催7回。

参加者累計 159名。(1回平均 23名)

[会 計]

(1) 平成11年度決算報告

(2) 平成11年度会計監査報告。大野信明監事から適正に処理されている旨の報告があった。

2. 平成12年度事業計画

[総 務]

(1) 野鳥写真展の開催

開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー

開催期間：平成12年5月9日～5月28日

(2) 「野鳥だより」の発送(120号～123号)

(3) 新年野鳥講演会、スライド映写会の開催 (平成13年1月中)

(4) 愛護会名入りカレンダーの作成

(5) 定例幹事会の開催(原則として毎月第1水曜日)

(6) 傷害保険の更新

(7) 30周年記念誌の発行

(予算、具体的内容は補助金状況により検討)

(8) 会員名簿作成の検討(予算執行との兼ねい)

平成11年度決算書

(収入の部)

区 分	決算額(A)	予算額(B)	増 減 (A-B)	摘 要
繰越金	221,562	221,562	0	
個人費	660,000	737,500	77,500	述べ369人
家族費	99,000	129,000	30,000	述べ43家族
団 体 費	10,000	20,000	10,000	建設維持管理センター 猟友会
寄付金	1,000	100,000	99,000	森田様からの寄付
参加費	60,000	48,000	△ 12,000	後援会、藤の沢探鳥 会参加費
売上金	18,000	196,200	16,200	野鳥だより、 カレンダーほか
雑収入	1,438	10,500	9,062	傷害保険戻り
合 計	1,233,000	1,462,762	229,762	

(支出の部)

区 分	決算額(A)	予算額(B)	増 減 (A-B)	摘 要
印刷費	570,000	499,250	△ 70,750	野鳥だより (4回発行)
通信費	200,000	172,220	△ 27,780	野鳥だより発送費 ほか
会議費	70,000	53,400	△ 16,600	幹事会等の会議室使 用料
消 耗 費	50,000	28,998	△ 21,002	封筒ほか
交通費	70,000	15,670	△ 54,330	野鳥だより発送事務 の幹事交通費
報償費	95,000	92,000	△ 3,000	事務所・講師謝礼、 事務連絡費
雑 費	70,000	63,106	△ 6,894	傷害保険料、写真展 ほか
予備費	108,000	0	△ 108,000	
特 別 会計へ		100,000	100,000	30周年記念事業特別 会計
合 計	1,233,000	1,024,644	△ 208,356	

(収支の部)

(収入) (支出) (残高)
1,462,762 - 1,024,644 = 438,118

内 訳

繰 越 金 438,118

[広 報]

「野鳥だより」120号～123号の発行

[探 鳥]

探鳥会 21回

(愛護会発足30周年記念「サロベツ・ベニヤ原生花園1泊探鳥会」を含む)

「野幌森林公園を歩きましょう」 6回

[会 計]

(1) 平成12年度予算(案)

[役員人事]

若干の幹事の担当変更、兼任以外に総務幹事に岡田幹夫氏が新たに加わった。

[平成12年度役員]

会 長 谷口 一芳

副 会 長 小堀 煌治、戸津 高保

監 事 大野 信明、村野 紀雄

代表幹事 白澤 昌彦

幹 事

(総務) ◎中正 憲佑、井上 公雄(兼)、大町 欣子
岡田 幹夫、蒲澤鉄太郎(兼)、栗林 宏三(兼)

佐藤ひろみ(兼)、三船 幸子、渡辺紀久雄

(探鳥) ◎井上 公雄、梅木 賢俊、梶浦 孝純
栗林 宏三、後藤 義民、佐藤 幸典

竹内 強、戸津 高保(兼)、富川 徹

富田 寿一、永島 良郎、浪田 良三

野坂 英三、長谷川富昭、早坂 泰夫

山田 良造 渡辺 俊夫

(広報) ◎樋口 孝城、佐藤ひろみ、白澤 昌彦(兼)

芹沢 裕二、竹内 強(兼)、武沢 和義

道場 優、道川富美子、山下 茂

(◎印各担当の代表者)

※会員数

項 目	10. 4. 1	11. 4. 1	12. 4. 1
個人会員数	340名	330名	325名
家族会員数	30家族	33家族	31家族
団体会員数	2団体	2団体	2団体

30周年記念事業特別会計

(11年度収入決算)

項 目	金 額	摘 要
繰 越 金	300,000円	
寄 付 金	100,000円	森田様からの寄付金
合 計	400,000円	

(12年度収入予算)

項 目	金 額	摘 要
繰 越 金	400,000円	
合 計	400,000円	

平成12年度予算書

(収入の部)

区 分	予算額	前年度増減	摘 要
繰越金	438,118	216,556	
個人会費	680,000	20,000	2,000×340人
家族会員	120,000	21,000	3,000×40家族
団体会費	10,000	0	5,000×2団体
寄付金	0	△ 1,000	
参加費	25,000	△ 35,000	冬の藤の沢探鳥会廃止のため
売上金	190,000	10,000	野鳥だより、カレンダーネクタイピン
雑収入	882	△ 556	預金利息ほか
合 計	1,464,000	231,000	

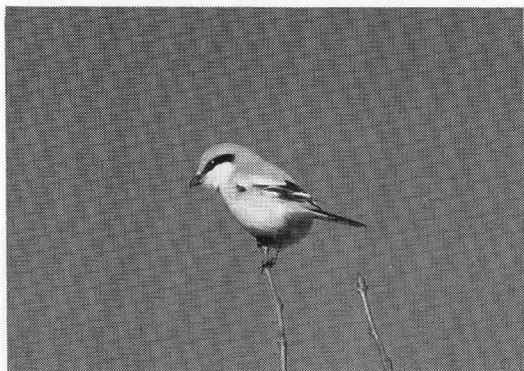
(支出の部)

区 分	予算額	前年度増減	摘 要
印刷費	570,000	0	野鳥だより(4回発行)
通信費	200,000	0	野鳥だより発送費ほか
会議費	35,000	△ 35,000	冬の藤の沢探鳥会廃止のため
消耗品費	50,000	0	封筒、タックシールほか
交通費	20,000	△ 50,000	探鳥幹事交通費廃止のため
報償費	95,000	0	事務所・講師謝礼ほか
雑 費	70,000	0	傷害保険料、写真展ほか
予備費	424,000	316,000	
合 計	1,464,000	231,000	

オオカラモズ観察報告

篠原盛雄（日本野鳥の会室蘭支部）

オオカラモズは日本では数少ない冬鳥として本州・四国・九州での記録がある鳥で、今年の1月時点での野鳥の会が調べた範囲で、道内初記録として新聞に載せました。ところが2月に発行された「北海道 島の野鳥」寺沢孝毅（北海道新聞社発行）にオオカラモズの写真と記述があり、問い合わせたところ、昭和57年11月20日に記録したとのことであり、今回は2例目なのかもしれません。いずれにしろ珍しい記録ですので、今後の観察の参考にしていただけたらと思います、オオカラモズ観察の報告を致します。



観察地は現在噴火活動を続けている有珠山の山麓、伊達市南有珠アルトリ海岸です。ここは海岸近くのヨシ原にヤナギ、ハンノキの疎林が広がっています。近くには田んぼ、畑があります。私は伊達市を流れる長流川を中心にここ4年間野鳥の記録を取っていますが、現在までに218種を確認しています。伊達市付近が渡りのルート上なのかわかりませんが、数は少ないもののシギ・チドリ類が36種カウントされ、珍しいものとしてはゴイサギ、カラシラサギ、コクガン（越冬）、ツクシガモ、トモエガモ、シマアジ、オオホシハジロ、タゲリ、ツバメチドリ、ツメナガセキレイ（マミジロツメナガセキレイ）、ミヤマガラス（越冬）、コクマルガラス（越冬）などが観察されていますので、伊達市付近も渡りの中継地として何らかの役割を持っているのかもしれません。

オオカラモズの発見は1999年12月28日（火）（小雨）です。伊達市は道内では気候が温暖で積雪も非常に少ないところです。1999年の12月は例年になく気温が高く、積雪が全くない状態で正月を迎えようとしていました。前年アルトリ海岸にあるアルトリ岬でゴマファアザラシを発見したので、今年も来ているかと出かけました。この

日は小雨が降っており、海岸道路近くのヤナギの木の上に雨に濡れながらじっとしているオオカラモズらしき鳥を1羽発見しました。30m程の距離で、1000mmのレンズで写真を撮りましたが、このオオカラモズと思われる鳥は雨で翼が濡れないように背中中の羽毛で翼をすっかり隠しており、その時点ではオオカラモズと思っていました。翌日写真が出来上がり、あまり鮮明でない写真を見ると、オオカラモズのようにも見え、12月30日（木）朝、オオカラモズの判別基準である初列風切～3列風切の白線を確認に出かけました。運よくまた同じような場所でこの鳥を確認し、60倍フィールドスコープで30m程の距離から注意深く観察し、オオカラモズであることを確認しました。同じ野鳥の会の会員の阿部賢一さん（虻田町在住）にも知らせ確認してもらいました。その時点ではオオカラモズが道内初記録であるような鳥であるとは知らず、年が明けて1月5日にもっと鮮明な写真がとれたらと、半日かけて写真を撮りました。何とか近づくことができ、オオカラモズと確認できる写真を撮ることができました。

オオカラモズを観察できた9日間、オオカラモズは50m×300m程の狭い範囲で、地上から4～5m程の高さのどころにとまり、体長5～6cmのヤチネズミ(?)のようなものを雪のないヨシ原でさかんとついでいました。オオカラモズの60cm程の至近距離にホオジロがとまっていることがありましたが、全く見向きもしませんでした。ネズミが大好物のようでした。小さなネズミの狩りがで



きるような環境であるかどうか、オオカラモズにとって大切なことのように思いました。しかし、残念ながらオオカラモズのいる近くでラジコンヘリを1日中飛ばす状態が続き、おまけにハンターがシカ撃ちにウロウロするという最悪の環境でした。

その後、出張等があり、1月6日以降観察することができませんでしたが、苫小牧市のウトナイ湖サンクチュアリの葉山レンジャーと話す機会があり、オオカラモズの話をする、それが道内初かもしれないということで調べてもらいました。

私の出張していた1月8日以降、伊達市も積雪30cm程となりました。越冬するのではと思っていたのですが、そうはなりません。環境としては最悪でしたし、おそらく積雪によってネズミをとれなくなったことが姿

を消した原因であろうと思います。

今回道南の伊達市で確認されたことは、大陸から鳥づたいに他の冬鳥と同じように、北海道を經由して南へ下るのかもしれませんが。今後のオオカラモズの確認に注視していきたいと思います。オオモズらしき鳥については、これから1羽1羽オオカラモズではないかどうかの注意深い確認が必要と思います。

〒052-0021 伊達市末永町97-38



「小樽港～祝津海岸
探鳥会」に参加して

2000. 1.23

雪田昭治

探鳥会に参加するようになって1年余り、ようやく若葉マークはとれたものの、まだまだ鳥の姿と名前が一致せず、仲々頭の中のメモリーカード(?)が増えていかない。小樽港はカモメ類やカモ類が多く見られるとのことで、どんなカモメやカモが、メモリーカードに加えられるか楽しみに参加した。

この日は生憎の雪模様、しかも寒い。集合時間に遅れて祝津の日和山灯台にはタクシーで駆けつける始末で、日頃の行いが悪かったのか、「ついてないなあー」と思いながら探鳥を開始。案の定最悪。取出したスコープも双眼鏡も気温差でレンズは曇るし、雪は着くしで、仲々ピントを合わせることができず、自分の目で確認できたのはオオセグロカモメとトドのみで、出だしは不調。

この日はその後、祝津漁港に回り、フェリーターミナルでの昼食を挟み、第一・第二埠頭から色内埠頭までの約5時間のバスツアーを終え、最後の鳥合わせでは24種類で、過去最低との話でした。こんな天候では止むを得ないか。

さて、この次、目にしたら姿と名前が一致するのはどれとどれか早速復習。まずはホオジロガモとシノリガモ。ホオジロガモはその名のとおり、頬に白い模様があり、分かりやすい。こんな鳥は好きだなあ。シノリガモも白、黒、灰、褐色の模様が鮮やかで見分け易そう。探鳥初級者の私は、カモメやカモ類は好きだ。彼らは集団で行動し、一カ所にジッと留まってくれ、何処にピントを合わせてもその姿を見せてくれるし、ピントを合わせたとたん居なくなるような意地悪もせず、時には一列縦隊の行進を披露してくれるからだ。

次はウミアイサ。後頭部のぼさぼさした羽は覚えておこう。ウミウは少し自信がなくなった。帰って凶鑑を見たらヒメウとそっくりで、どちらを見たのか分からなくなった。

カモメ類ではオオセグロカモメ。翼が黒いのがオオセグロで灰色がセグロと覚えていたが、次にも見分けできそう。

以上の5種類をこの日の成果として、頭のメモリーカードにしっかりと刻み込んでおこう。

最後にシロエリオオハムのこと。名前は初耳、姿も勿論初めて。一瞬何に大騒ぎしているのかと思ったが、チェックリストにもない珍しい鳥とのこと。もしかしてこの日はついている日だったのかなあ。

〒005-0841 札幌市南区石山1条2丁目11-10

【記録された鳥】ハジロカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、トビ、スズガモ、シノリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、カモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ワシカモメ、ウミガラス、ケイマフリ、ウミスズメ、ヒヨドリ、シジュウカラ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シロエリオオハム

以上23種

【参加者】青池道子、石橋和子、五十嵐美保子、井上公雄、板田孝弘、伊藤恭子、伊藤聖子、江尻真喜子、大町欽子、勝見輝夫・真知子、川島恵和子、蒲澤鉄太郎、河野美智子、川端功治、北山政人、栗林宏三、孝月康夫、孝月秀子、小須田秀子、佐藤幸典、佐々木泰夫、斉藤昌子、菅間慧一、須田 節、清水朋子、白澤昌彦、道場優、高栗 勇、高橋昭一、武沢和義、戸津高保・以知子、戸嶋裕子、中正憲祐・弘子、成澤里美、西山礼子、西川喜久世、橋爪陽子、樋口孝城・陽子、広木朋子、久田伸一、逸見トモ子、前田秋子、松本美智子、山田としえ、山下和子、雪田昭治・久子、吉田 功、吉田美子、横山加奈子、渡辺吉宗

以上55名

【担当幹事】梅木賢俊、白澤昌彦、戸津高保

初めて探鳥会に参加して

—野幌森林公園—

2000. 2. 6 前 東 昭

私は知床の大自然の中で生れ、自然に生かされながら生活をしてきました。この一年を振り返っても4月～11月は主に登山を中心とした自然散策、12月～3月は裸林の中を気儘に単独で動き回る歩くスキーでのウォッチングです。「自然」とは断ち難い絆があるようです。

初めて探鳥会に参加させていただきました。大沢口の見張役エゾフクロウは非番のようで、代ってエゾリスの他カラの仲間が元気よく迎えてくれました。森林奥に2km程向かう間野鳥の姿も鳴き声もなく、森は静まりかえっていました。集団での探鳥が初めての私は、これは野鳥達が警戒しての静寂と内心考えました。しかし大沢園地に近づくにつれ囁きが聞こえ始め、木々を渡る姿も散見できるようになり、私の心配も解消されました。野鳥を視認出来たときにはそっと居場所を、鳴き声を確認した時は聞き耳を立て隣の仲間の特徴や雌雄の別を伝えるなどして満足感を共有したのです。動物の足跡から帰化したアライグマが繁殖してアオサギを追い出し、今はフクロウの営巣する樹洞を奪い、生態系破壊が進行していることを知らされました。遊歩道近くの樹林は春の息吹きを感じさせていました。キタコブシに蕾のふくらみが見られ樹林が春の成長に向けて水を吸い上げる音を聞くことが出来るのも間近のようです。陽当りの良い木立からは春を囀る野鳥の声が聞かれ、自然の温もりを覚えたのです。

自然を師とし友とする野外活動は不思議と人の心を開かせる力を持つといえます。自然界の環境に適応し動植物の本能に従った真剣な生き方は、私の眼から見れば謎があり、不思議があり、互いに調和を保つことの素晴らしさを教えてくれますし、生きることの感動を与えてくれています。自然に接することで無意識のうちに生きる喜びを教えてくれると思います。

聞くとことによりますと、日本野鳥の会の他自然を愛し保護活動を進める団体も参加者が減少傾向で、特に若者の参加が少ないといえます。今度の探鳥会参加者にも同様のことがいえましよう。人間が自然界の動植物たちと調和と協調を保ち豊かな生き方をするには、幅広い年齢層の野外活動への積極的な参加を具体的に推進することが大切だと思います。思いの一端を記しました。

今度は皆様の温いお人柄に接し、単独行では経験出来ない多くの事を学びました。企画された関係者の方にお礼を申し上げます。

〒067-0042 江別市見晴台73-14

【記録された鳥】トビ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、

ヒヨドリ、ツグミ、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、ウソ、カケス、ハシブトガラス 以上15種

【参加者】野田紘幸、青池道子、後藤義民、大高洋平、中正憲信、板田孝弘、屋代育夫、村上和子、横山加奈子、雪田昭治・久子、勝見輝夫・真知子、戸津高保・以知子、岡田幹夫、大賀 浩、山田良造、今村三枝子、白澤昌彦、岸谷美恵子、成澤里美、前東 昭・節子、広木朋子、佐々木 裕、栗林宏三、井上公雄 以上28名

【担当幹事】戸津高保、栗林宏三

円山公園探鳥会

2000. 3. 5 今 村 三枝子

1年に1度の円山公園探鳥会である。

今年も桜や梅の枝にとまるウソに会えることを楽しみに参加する。そんなことはない思いながらも、数年前、円山に遊びに来てくれたベニバラウソに会えたりして……。なんて虫のいいことを考えてしまい、つつい期待が膨らんでしまう。

今年の札幌は、やけに雪が多かったが、円山も例にもれず、雪が深いようだ。エサ台も雪の壁の向こうになってしまい見えない状態である。その雪の中を雪中行軍して梅林を進むが、結局ウソには出会わずに終わってしまう。それでも松に見え隠れするキクイタダキと、例年どおりエサ台付近でアトリに会えたのでまずはよしとしなければと、自分に言い聞かせて終わった探鳥会であった。

それにしても、このまま地球の温暖化が進むと、札幌にもしめった重たい雪がドカドカと降るようになるのだろうか、積もる雪を見る度に、考えてしまったこの冬だった。今年こそは植苗の探鳥会に参加し、多分、7年ぶりのシマアオジに会えることを楽しみに春を待ちたいと思っている。

〒003-0006 札幌市白石区東札幌6条3丁目1-2-311

【記録された鳥】アカゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、アトリ、カワラヒワ、ウソ、シメ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上19種

【参加者】猪師 勉、上野典子、高橋利道、松原寛直、武沢和義・佐知子、樋口孝城・陽子、山田甚一・れい子、蒲澤鉄太郎・則子、鈴木繁雄・英子、雪田昭治・久子、大賀 浩、小堀煌治、岡村敏夫・玉枝、横山加奈子、山田良造、村上和子、三井勉子、後藤義民、今村三枝子、白澤昌彦、中正憲信、三船幸子、板田孝弘、青池道子、内田 孝、佐々木潤子、井上公雄 以上34名

【担当幹事】武沢和義、中正憲信

ウトナイ湖探鳥会に参加して

2000. 3. 26 三浦 敏 靖

この日は風もなく暖かである。サンクチュアリの駐車場からレイクランドまでの雪道を一足毎にズボズボッと埋まりながら、集合所に向かった。集合所では、オオハクチョウの他に多数のオナガガモが陸に上がって、パンを貰っていた。人慣れしているのには驚いた。非常に警戒心の強いカモだと思っていたのに……。

10時を過ぎて出発した。湖面は、まだ氷に覆われている所が多い。今年は、雪解けが遅いようだ。湖岸に沿って歩くが、逆光の上に遠くにいるので見ずらいものも多い。でも、ハクチョウ類・ヒシクイ・カモ類・アイサ類などたくさんの鳥が見られ楽しかった。特に、ハイイロチュウヒのメスが、東岸の樹上をトビに追われながらふわりふわりと飛んでいたのが印象深かった。初めてお目にかかった鳥であり、見たことのない鳥だと分かるが、ひとりでは決して識別できなかったことである。できれば、もっと近くで、そしてオスの姿も見られたらと思うのは、欲張り過ぎであろうか。

ネイチャーセンターの中で、苦小牧の錦岡で保護されたケイマフリを見られたことも強く心に残っている。この鳥も、私にとって初見の鳥である。段ボールの箱に入れられていたとはいえ、実際にすぐ目の前で見られた喜びは大きい。目の周囲が白く、黒い嘴の中は真っ赤であった。斜め上から垣間見ただけなので全体的な観察はできなかったが、蓋を開けると飛び跳ねて職員の指に噛み付く？ほど、元気であった。怪我もないので、すぐ海に放すとのこと。ほっとしてその場を離れた。

所用があって苦小牧に来ており、たまたま野鳥愛護会の探鳥会があることを知って参加させて頂きました。紙面では書ききれませんが、収穫がいろいろあり満足な半日でした。本当にありがとうございました。

午後から時間があったので、北大演習林に行ってみた。会員の方も来ていた。ハチジョウツグミの情報はない。諦めて帰ろうとした時、樹の上の方を熱心に観察しているお二人に会った。何を見ているのか尋ねると、ハチジョウツグミとのこと。早速、望遠鏡を覗かせて貰った。派手さはないが何か優しさを感じた。人を怖がるようでもなく、堂々としている。細かなところまでじっくり観察できた。蒲澤さんご夫妻ありがとうございました。

帰函の翌日、有珠山のことを知った。一日も早い噴火の沈静と平安な生活が戻ってくることを祈ってやまない。
〒041-0836 函館市山の手1丁目26番11号

【記録された鳥】アオサギ、トビ、オジロワシ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、

ヒドリガモ、ヨシガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、カモメ、セグロカモメ、ユリカモメ、コゲラ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ウソ、カケス、ハシボソガラス、ハイイロチュウヒ
以上29種

【参加者】犬飼 弘、山口和夫、成澤里美、村上和子、青池道子、今泉秀吉、岸谷美恵子、高栗 勇、臼田 正、吉田 功・美子、松原寛直・敏子、蒲澤鉄太郎・則子、樋口孝城・陽子、大滝夫妻、栗林宏三、村田静穂、横山加奈子、山田良造、大賀 浩、板田孝弘、富田寿一、三浦敏靖、平澤幸雄、鈴木 実、井上公雄
以上30名

【担当幹事】富田寿一、山田良造

宮島沼探鳥会に参加して

2000. 4. 23 品川 陸 生

前日の天気予報では空知方面は雨の予報が出ていましたが、年に1度のガンたちの渡りを見るのにベストシーズンであり、行くか行かないか迷っていましたが、朝めざめると自宅付近はくもり空、テレビの天気予報もくもりとのこと、まずとりあえず宮島沼に向かい車を走らせました。宮島沼に到着すれば、空模様はくもりであったが風もなく鳥を見るのに絶好の天気で、すでに20人ほど人々が思い思いの鳥を見ておられました。

宮島沼には数多くのガン・カモ・ハクチョウたちが湖面に羽根を休めており、私にとって1年ぶりの再会となりました。さっそくフィールドスコープを取り出し鳥たちを見ていたのですが、幹事の方が“シジュウカラガン”“サカツラガン”がいるとのこと、彼らのいる場所を教えてもらい、まだ見たことがない彼らのことを図鑑で確認しながら懸命にさがし出し、この目で初めて確認することが出来ました。おかげで、自分の目で見た鳥の種類が2種類増加し、前年の探鳥会で見ることの出来なかった鳥が見られて感激を新らたにしました。この場をお借りして2種類のガンたちがいる場所を教えてくれた幹事さんにお礼を言います。

探鳥会が終って、大富会館で開催されていた写真展を見て力作ぞろいに感激し、とくに夕陽の中を飛んでいるガンたちの集団の写真には、宮島沼のすばらしさを人々に伝える写真だと、自分なりに感動しました。

後日、新聞報道によれば、宮島沼には約67,000羽ほどのマガンが集結したとのこと。この宮島沼が彼らにとって北への旅立ちの重要な集合地点であるので、この環境が将来に渡っても保護されるように努力されている人々に感謝し、ガンの感想文を書きました。

〒005-0831 札幌市南区中ノ沢3-13-10

【記録された鳥】アオザギ、トビ、シジュウカラガン、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、コガモ、マガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カモメ、キジバト、ヒバリ、ハクセキレイ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ニューナイスズメ、ムクドリ、サカツラガン

以上24種

【参加者】小関敏文・諒人、大滝和磨・洋子、山下和子、

勝見輝夫・真知子、鈴木繁雄・英子、蒲澤鉄太郎・則子、藤原伸彦・和子、樋口孝城・陽子、小林芳樹、亀井厚子、清水正男、岡田幹夫、品川陸生、田辺 至、横山加奈子、村上トヨ、佐藤幸典、岩崎孝博、山田良造、道川富美子、井川修二、戸津高保、後藤義民、大野信明、小堀煌治、白澤昌彦、西永之恵、荒木、長谷川佳代子、川上秀幸、谷口、成澤里美、井上公雄

以上40名

【担当幹事】佐藤幸典、山田良造

【鵲川】 2000年8月20日(日)
9月3日(日)



短い夏をユーラシア大陸北部の高緯度の地で過ごしたシギ・チドリたちが、冬の暖かい南の地で過ごすため渡りはじめ、この鵲川にも立ち寄ります。

会が創立した翌年からこの鵲川での探鳥会がはじまり、今年で29年続いています。かつては有名な渡りの中継地として多くのシギ・チドリが立ち寄り賑わいましたが、海岸線の浸食、湿地の乾燥化が進み、渡来数が減少傾向にあります。他にチュウヒ、オオタカ、ノビタキ、オオジュリン、シヨウドウツバメなど20種程が観察されるでしょう。なお、終了後鵲川から苦小牧より約4km程の入鹿別川河口の海岸湿地に新たなシギ・チドリの中継地が発見され、そこでもウォッチングを楽しむ予定です。

集合＝JR日高線鵲川駅前 午前9時30分

交通＝道南バス浦河行き札幌駅前バスターミナル発
午前8：00発 鵲川農協前下車徒歩5分

【野幌森林公園を歩きましょう】

平成12年7月9日(日)・9月10日(日)

集合＝大沢口駐車場入口 午前9時

☆余程の悪天候でない限り、行きます。

☆交通機関を利用される方は、各自でお確かめ下さい。

☆観察用具・筆記具・昼食・敷物・雨具などをお持ち下さい。

☆探鳥会のお問い合わせは 011-261-5465

自然保護協会へ。(月～金 10：00～16：00)

☆愛護会発足30周年記念

「サロベツ・ベニヤ原生花園」探鳥会

日程＝平成12年7月1日、2日

参加希望者が多く、既に定員が満たされています。今回の結果によっては、次年度以降も折を見て1泊探鳥会を開催することを検討していく予定です。

☆「野鳥だより」が大きくなります

今までの「野鳥だより」はB5版で、文字サイズは8

ポイントでした。字が小さくて読むのがたいへん、もう少し字を大きくして欲しいというご希望が多く寄せられていました。次号(第121号)からは一回り大きいA4版、字は9ポイントになります。内容量自体は変わりませんが、写真や図表も大きくなりますので、随分と見やすくなることと思います。これまでの「野鳥だより」をファイルにまとめている方々にとっては、大きさが変わってご面倒をおかけするのですが、どうぞ新しいファイルをご用意下さい。

◆新入会員名簿

(敬称略)

吉田 美子	北広島市朝日町3-8-5
櫻井 マチ子	札幌市東区伏古8条5丁目3-802
森脇 望	江別市大麻園町11-6
堂向 隆	札幌市厚別区厚別東3条6丁目413
田隈 泰信	札幌市北区拓北6条2-10-15
渡辺 吉宗	札幌市清田区2条2丁目6-15-602
山口 和夫	江別市元江別849-14
内山 正裕	江別市大麻元町164-39
三井 勉子	札幌市中央区宮の森1-9-3-18
道場 好京子	礼文郡礼文町船泊字沼の沢
久志本 アメ	札幌市厚別区厚別西4条2-4-5
榊井 邦雄	札幌市白石区中央3条2-5-8
大滝 和磨	札幌市手稲区富丘3条4-9-1-201
品川 陸生	札幌市南区中の沢3-13-10

◆家族会員になられた方

(敬称略)

道場 優・信子

◆住所変更

(敬称略)

藤野 昌男	札幌市西区山の手2条5丁目 4-3-5 小泉マンション2F
速藤 尹希子	札幌市豊平区中の島2条3丁目 3-1-314
岡田 実	横浜市青葉区荻子田3-20-30

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465